

# 中小企業ぎふ

Vol.700

2026年1月25日 隔月25日発行

岐阜県中小企業団体中央会

岐阜市数田南5丁目14番53号  
OKBふれあい会館9階

☎ 058-277-1100

HP <https://www.chuokai-gifu.or.jp>

**連携の力で無限の可能性にチャレンジ!**  
～中央会は、組合・中小企業の変革・挑戦を応援します～



有限会社愛和工芸の和紙人形とさるぼぼ

## 組合紹介 2~3

岐阜県室内装飾事業協同組合

## クローズアップ企業 4~5

飛騨のさるぼぼ製造協同組合 組合員  
「有限会社愛和工芸」

## 専門家コラム

「今をどう見る～生き残りツールとしての情報」 6~7

## 中央会の活動 8~12

- ・会長新春インタビュー
- ・DX成功に必要なノウハウを学ぶ「現場見学会」を開催
- ・価格転嫁と団体協約の実践セミナーを開催
- ・女性部等活動支援研修会を開催
- ・官公需フォーラムを開催
- ・外国人技能実習制度適正化講習会を開催
- ・「2026年施行 カスハラ対策制度改正セミナー」を開催
- ・健康経営の普及促進並びに健康づくりの推進に向けた連携協定を締結
- ・組合士協会 先進事例視察研修を実施
- ・労働系助成金活用セミナーを開催
- ・組合役員・事務局スキルアップ講座を開催

## 組合等の活動 12~14

- ・岐阜県菓子(工組)  
「ぎふの栗おやつマルシェ」に出展
- ・岐阜県印刷(工組)  
「GIFUクラフトフェア2025」に出展
- ・赤帽岐阜県軽自動車運送(協)  
ぎなんフェスタ2025に出展
- ・飛騨高山宮川朝市(協)朝市収穫祭を開催
- ・岐阜県製本紙工(工組)  
手作り手帳ワークショップの実施、  
尾張名古屋の職人展に組合が協力参加
- ・岐阜県毛織工業(協)  
「マテセンコレクション2025～電車内・駅での  
ファッションショー!～」、「学生向け企業PR」を初開催
- ・多治見地区電気工事業(協)青年部  
組合青年部が出前授業を実施
- ・岐阜県陶磁器工業(協連)「美濃焼新春見本市」を開催

## 全国の先進組合事例 15

- ・西尾茶(協)

## 景況レポート 16

## インフォメーション 17

- ・新春 職員集合写真
- ・DXって実際どうなの?成功事例から学ぶ変革のヒント

## 年賀広告 18~22

# 組合紹介

## こんな活動をしています！

本会は、多種多様な業種・業態の組合等が会員となっており、これが本会の特徴でもあります。各組合がその特徴を活かし日々活動を続けていますので、皆様の仲間を紹介します。



### 岐阜県室内装飾事業協同組合

- 理事長 虫賀 友則
- 組合員数 91名
- 設立年月 1970年9月
- 住所 岐阜市六条南2丁目12番13号
- TEL 058-271-2635

### 人を育て、技をつなぐ ～未来の室内装飾を担うために～

#### ◆組合の歴史・活動

#### ■快適な住空間の創造と「匠の技」の継承



虫賀理事長

当組合は、高度経済成長期の建設ラッシュに伴う内装仕上げ工事の需要拡大を背景に、昭和42年に前身となる「岐阜県室内装飾商業連合会」として産声をあげました。

昭和45年9月に現在の「岐阜県室内装飾事業協同組合」へと組織を改編。組合員43名で新たなスタートを切るとともに、上部団体の「日本室内装飾事業協同組合連合会（以下、日装連）」に全国で12番目に加入し、業界の地位向上に向けた大きな一歩を踏み出しました。

昭和53年頃からは技能士育成に注力し、組合員166名・技能士80名を超えるまでに、組織基盤を拡大。昭和51年の建築基準法改正により、内装材の安全性への意識が高まる中、平成8年より「防火壁装標準施行講習会」を継続的に開催してきました。こうした活動を通じて、組合員の防災意識向上と防災ラベルの適正使用徹底を図っています。

平成12年5月には時代を担う若手経営者による「青年部」を設立しました。なお、青年部は令和8年度より「次世代委員会」と名称が変わります。

また、平成17年には厚生労働省のシニアワークプログラム事業として「壁装業務アシスタント講習」を実施するなど、幅広い世代の就労支援にも貢献してきました。

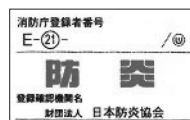
設立当初は室内装飾品の共同購入や共同販売が主軸でしたが、時代の変遷とともにその役割も大きく進化しました。現在は安全な住環境を支える「防災ラベル及び防火壁装認定ラベルの支給申請事務代行業務」、確かな技術力を継承する「教育情報事業」、そして「ボランティア活動事業」の3本柱で、地域社会に貢献する組織として、各種事業を展開しています。

#### ■安心と安全の証「防災ラベル」・「防火壁装ラベル」

当組合は、内装仕上げのプロフェッショナルとして、施工が適正に行われたことを証明する「防災ラベル」及び「防火壁装ラ

ベル」の交付業務を担っています。消防法では、不特定多数が利用する地下街や病院、高層建築物において、火災時の延焼を抑制する防災物品（カーテンやじゅうたん等）や防火壁装材の使用が義務づけられています。組合は消防庁の登録確認機関として、信頼の証であるラベルを交付しています。

この信頼を支える基盤が、平成8年より継続している「防火壁装標準施工講習会」です。組合員は最新の消防法規や施工技術の習得が義務づけられており、3年毎に講習を受講・資格更新する必要があります。これにより、単にラベルを貼付するだけでなく、確かな施工技術と管理能力を兼ね備えた「有資格者」としての社会的責任を果たしています。



防災物品ラベル

また、令和4年にはコロナ禍における業務環境の変化に対応し、従来の手書きやFAXによる申請手続きから「Web申請システム」へと移行する日装連の傘下組合が増えました。このデジタル化により、事務手続きの迅速化と記載ミス防止を図るとともに、施工履歴を正確に管理する「トレーサビリティ」を確保し、時代に即した透明性の高い管理体制を構築しています。

当組合としても、運用ルールの検討を重ね、導入に向けて準備してまいります。

#### ■未来へつなぐ技能士の育成と人材確保

##### (1) 国家資格「技能士」検定と組合による技術支援

業界にとって人材は宝です。そこで、国家資格である技能士検定試験の実施にあたり、「プラスチック系床仕上げ工事作業」や「化粧フィルム工事作業」などの実技を学ぶ場を提供しています。具体的には、検定試験に先立ち、受験者を対象に「トライアル（事前講習会）」を実施。合格の鍵を握る「寸分の狂いもない精度」と「正しい施工手順」を習得するため、熟練の指導員が手本を披露し、実技の細かな所作やプロならではのコツを直接伝授することで、高い合格率の維持と組合全体の技術力向上を図っています。

また、壁装・表装作業については、表具組合と緊密に連携し、業界全体の技術水準の維持・向上に努めています。技能士資格（1級・2級）は、単なるライセンスの取得に留まらず、下地処理から最終的な仕上げまで完璧に遂行できる「一流の技術」を持つことの証です。この確かな技術に裏打ちされた技能士による施工こそが、お客様の安心と満足を育む最良の手段であると確信しています。

##### (2) 「ものづくりマイスター」による次世代育成

厚生労働省の「若年技能者支援等事業」である「ものづくりマイスター制度」に、高度な技能と長年の経験を有する熟練技能者を登録しています。同制度は、優れた技能を持つ専門家をマイスターとして認定し、中小企業や教育現場での実技指導を通じて技能継承と後継者育成を促進するもので、現在13名が在籍しています。

令和6年度から工事技能担当委員と青年部が主導し、岐阜県職業能力開発協会とも連携しながら、県内の工業高校への「出前授業」を実施しています。令和7年1月から開始した岐南



出前授業の様子

工業高校での授業ではマイスターが講師となり、壁紙(クロス)貼りや直角裁断の実演・指導を行い、「ものづくり」の楽しさと奥深さを生徒たちに伝えています。また、今年度からは岐阜総合学園高校や大垣工業高校、中津川工業高校でも開催しました。

こうした活動は、将来の担い手不足という課題解決に向けた取り組みであるとともに、内装業界の魅力を発信する貴重な機会となっています。今後も次世代への橋渡しとして、この取り組みを推進していきます。

### (3) 子供たちに届ける「ものづくり」の喜び

令和元年度より小中学校を対象とした「ものづくり体験」を実施しています。当初は厚生労働省の「ものづくりマイスター制度」を活用していましたが、現在は県から補助を受け、継続的な地域貢献活動として定着しています。直近の活動では、ブックエンドに色鮮やかな和紙を彩る工作体験を行い、子供たちに「手仕事の楽しさ」を伝えました。

また、隔年開催の祭典「ぎふ技能フェスティバル(主催:県技能士会連合会)」にも積極的に出展し、インテリアの端材などを活用した「ファブリックボード作り」のワークショップを開催。多くの方々にご参加いただき、大変な盛況となりました。こうしたワークショップを通じて、次世代を担う子供たちに内装仕上げという仕事の魅力を身近に感じてもらえるよう、今後も親しみやすい普及活動を継続していきます。

## ■ ボランティア活動事業を通じた地域社会への貢献

当組合では、専門技術を活かした社会貢献活動を継続的に実施しています。平成18年から県内各地の障がい者福祉施設、平成27年からは児童養護施設等を対象に、県や市と連携して修繕の必要性が高い施設を選定し、老朽化したカーテンの新調や壁紙(クロス)の張替え、カーテンレールの設置などを無償で行っています。

本活動のルーツは、平成12年に設立した青年部にあります。日装連の青年部活動をモデルに、本県でも青年部の独自事業としてスタートしました。開始当初は社会貢献といった位置づけに加え、行政に



カーテンの取替を行う様子

対し「専門業者への分離発注」を要望するため、施工品質の高さを実証し、業界の地位向上と受注機会の拡充を図るという戦略的な意義も併せ持っていました。

その後、活動の意義と実績が広く認められ、現在は組合全体の重点事業として位置づけられています。組合役員を中心に年に1回実施するという確固たる方針のもと、継続的な支援体制を構築しています。長年にわたる地道な奉仕活動が高く評価され、施設からの感謝の声とともに、県や市からも多くの感謝状や表彰状をいただいています。今後も行政とのパートナーシップを深め、組合員の高い技術で地域への恩返しを続けていきます。

## ◆ 組合が目指す方向性とは

### ■ 技術と信頼を次世代へつなぐ

誰でも手軽に内装を楽しめる現代だからこそ、国家資格「技能士」の真価が改めて問われています。下地の的確な見極め、寸分の狂いもない仕上げ、そして長期間にわたり美観と安全性を維持する施工。これらはためまめ研鑽を積んだ有資格者にのみ成し得る“技術の結晶”にほかなりません。

当組合では、「ものづくりマイスター」による指導体制を強化し、技能士資格や「防災ラベル」が持つ社会的信頼を広く発信していきます。目指すべきは、過度な価格競争ではなく、確かな「安心と品質」で選ばれる業界の確立です。この揺るぎない技術を次世代へ繋ぐため、私たちは「若者を待つ」姿勢から脱却し、積極的に「魅力を伝える」アプローチを推進します。県内の工業高校への「出前授業」や技能フェスティバルを通じ、空間が生まれ変わる瞬間の感動を直接届けることで、内装業を「将来の希望」へと昇華させたい。若者が技能を磨き、自らの仕事に誇りを持って歩める環境整備こそが、組合の使命だと考えています。

さらに、こうした志を支えるのは、多様な人材が活躍できる持続可能な土壌です。内装仕上げは、繊細な色彩感覚や細やかな配慮が求められ、女性の感性が多いに活かされる分野です。現場で活躍する女性技能者の増加を追い風に、事務負担の軽減や長時間労働の是正といった労働環境の改善も加速させたいと考えています。子育て世代から熟練のシニア技能者まで、誰もが無理なく能力を発揮し、働き続けられる未来へ、組合一丸となって内装業界の未来を切り拓いていきます。

## 業界豆知識

### プロが教える「カーテンの寿命と替え時」

お客様から「カーテンって、いつ新調すればいいの?」という質問をよくいただきます。確かに近年のカーテンは品質が向上しており、昔のように簡単に破れることはありません。そのため、気づけば10年以上同じものを吊るしている、というご家庭も多いのではないのでしょうか。

昭和の時代。カーテンの主流は「綿」や「レーヨン」などの天然・再生繊維でしたが、紫外線に弱く、長年日光を浴びると繊維が脆くなり、洗濯で裂けてしまうことが珍しくありませんでした。一方、現在の主流である「ポリエステル」は、耐光性と耐久性に非常に優れています。10年、20年と経過しても生地自体はしっかりしていることが多く、それが「替え時」を分かり難くさせている面もあります。

生地は丈夫でも、窓際の過酷な環境を如実に物語るのが「アジャスターフック(カーテンをレールに掛けるプラスチック部品)」です。窓際は常に強い紫外線と熱に晒されており、プラスチックは経年劣化で硬化します。カーテンを開閉した拍子にフックが「ポキッ」と折れ始めたら、それは窓際全体の環境がダメージを受けているサインです。カーテンも目に見えない劣化が進んでいると考え、交換を検討するタイミングと捉えてください。

見た目が綺麗であっても、長年のホコリや生活臭、調理の油煙などは蓄積されています。これらは家庭用洗濯機では完全に落とせないため、衛生面や機能性は徐々に低下していきます。私たちはカーテンの物理的な寿命とは別にインテリアとしての「賞味期限」は10~15年だと考えています。「破れたから替える」のではなく、衛生面を見直したり、季節や気分に合わせて空間をリフレッシュしたりするために替える。そんな「暮らしを彩る楽しみ方」として、カーテンの掛け替えを検討してみてくださいはいかがでしょうか。

# クローズアップ企業

## 飛騨のさるぼぼ製造協同組合 有限会社愛和工芸

《企業概要》所在地 岐阜県高山市本母町450番地2  
電話 0577-32-1736  
代表 代表取締役社長 森林 良太  
主な事業 観光土産品の企画・製造・卸売業



有限会社愛和工芸の外観

### 飛騨高山の伝統工芸品「さるぼぼ」 ～伝統の作り方を守り続けて～

◎ 御社のこれまでの沿革についてご紹介ください。

#### ◆和紙人形からさるぼぼへ



森林代表

当社は、岐阜県高山市本母町に本社を構え、観光土産品の企画・製造・卸売を手がけています。当社の歩みは、昭和50年4月に現会長が手作りのお店「愛和堂」を創業したことから始まります。

創業当初は和紙人形を主軸とし、手仕事ならではの温かみと繊細さを大切にしながらのづくりを続けてきました。転機となったのは、飛騨高山の観光ブームとともに高まった「さるぼぼ」への需要です。当社は和紙人形で培ってきた技術と感性を活かし、さるぼぼの製造・販売へと事業の幅を広げ、昭

和62年に「有限会社愛和工芸」として法人化を果たしました。

当社の大きな実績の一つが、さるぼぼの「雑貨化」です。それまで主流であった置き型人形にとどまらず、キーホルダーやタオル、ポーチなど、観光客が気軽に手に取れる商品へと展開。さるぼぼに「持ち帰れる思い出」として新たな価値を生み出しました。

さらに、現在では広く親しまれている「色ごとの願掛け（赤は家庭円満、金は金運など）」を取り入れた商品展開も、当社が先駆けて推進したものです。こうした柔軟な発想と工夫により、伝統的なモチーフであるさるぼぼを、時代とともに歩む身近な存在へと進化させてきました。

平成に入ると、安価な海外製品をはじめとする類似品が市場に出回るようになり、品質やブランド価値を守る必要性が高まりました。そこで平成18年に地元の製造業者が結集し、「飛騨のさるぼぼ製造協同組合」を設立。当社も中心メンバーとして参画しました。

地域団体商標「飛騨のさるぼぼ」の取得により、粗悪な類似品との差別化を図るとともに、厳格な品質基準を設定。飛騨高山で作られる本物のさるぼぼの価値を守り、次世代へと受け継ぎ取組を今日まで続けています。

◎ 御社の特徴や方針を教えてください。

#### ◆看板商品「さるぼぼ」の商品展開

飛騨高山の古い町並みを歩けば、必ず目にする赤い人形「さるぼぼ」。さるぼぼは古くから、安産や良縁（「猿」と「縁」をかけた縁起）、子どもの健やかな成長を願い、祖母が子や孫のために一つひとつ手作りしてきた、愛情のこもったお守りです。

当社では創業当初、置き型人形のさるぼぼから始まり、定番の赤いさるぼぼに加え、風水の考え方を取り入れた「さるぼぼ風水布ミニ」や「さるぼぼ布キーホルダー」、さらには店舗ディスプレイ用の

20cm以上の大型さるぼぼなど、用途や場面に応じた多様な商品展開を進めてきました。

近年は、外国人観光客の増加を背景に、実用性を重視した商品作りにも力を入れています。Tシャツや靴下などの衣類は、「飾る」よりも「使える」を好む海外の方々の嗜好に合致し、好評を得ています。また意外なことに、腹掛けのみを身につけたシンプルな「裸のさるぼぼストラップ」が、外国人観光客の間で人気を集めるなど、新たな発見も生まれています。

このほか、東海北陸自動車道の飛騨トンネル開通時には、ネクスコ中日本のブランドカラーであるオレンジ色のさるぼぼ製作を請け負いました。トンネル採掘時に採取された「貫通石」を納めた交通安全のお守り製作をはじめ、平成20年にさるぼぼが岐阜県郷土工芸品に指定されたことを契機に、岐阜県のマスコットキャラクター「ミナモ」とのコラボレーション商品「ミナモさるぼぼ」、さらには高山市のPR商品など、各種オーダーメイドにも対応しています。



さるぼぼ布キーホルダー



ミナモさるぼぼ

#### ◆人の手による「さるぼぼ」づくりが生む差別化

##### (1) 作り方へのこだわり

当社では、さるぼぼづくりに際して「人の手」によるものづくりを何よりも大切にしています。

製作工程は、生地のカット、ミシン縫製、綿詰め、頭部の成形、仕上げの5工程に分かれ、それぞれを分業で担う体制を整えています。



「綿詰め」の作業風景

一部の工程には機械も取り入れています。さるぼぼの表情や風合いを決定づける「綿詰め」や、丸みを帯びた柔らかなフォルムの形成は、熟練した職人の手作業でなければ生み出すことができません。機械のみで製作すると、どうしても硬く角張った印象になりがちですが、当社は創業以来、昔ながらの手仕事を大切に守り続けています。

作り手にとっては数万個のうちの一つであっても、お客様にとっては「選ばれた唯一の一体」です。その思いに応えるため、どの商品を手にとっていただいても変わらぬ品質となるよう、製造指導や品質チェックを細やかに行っています。

##### (2) お土産は「その土地の記憶」

さるぼぼは、飛騨高山を訪れた証であり、旅の思い出そのものを形にした存在です。もし「どこでも作られて、どこでも買えるもの」になってしまえば、お土産としての価値は失われてしまいます。飛騨で作られるからこそ、そこに旅の情緒や物語が宿る。と私たちはそう考えています。

そのため、さるぼぼの製造・販売地域（白川村、下呂市、高山市、飛騨市）を限定し、この原則を大切に守り続けています。こうした取り組みは、観光客の「旅の記憶」を守るだけでなく、地域に根ざした雇用の創出や経済の循環にもつながっています。人と街を支え、飛騨高山のものづくりを未来へとつなぐ“エンジン”としての役割を、これからも果たしていきます。

## ◆SNSを通じた情報発信

### (1) SNSが起こした奇跡 ～instagramによる50万回再生と認知拡大～

数年前、当社はコロナ禍の影響に加え、職人の高齢化による深刻な担い手不足の課題に直面していました。

従来の求人媒体では十分な反応が得られない中、新たな可能性として着目したのが、InstagramやTikTokといったSNSの活用でした。「伝統工芸は地味」「地方企業にSNSは向かない」といった周囲の声もありましたが、まずは「知ってもらおう」が第一だと考え、職人の手仕事の様子や日常の風景を発信したところ、投稿した動画の一つが一夜にして50万回以上再生されるという大きな反響を呼びました。



Instagram

この出来事をきっかけに、さるぼぼの認知度は飛躍的に向上し、伝統産業が持つ未来の魅力が、デジタルの拡散によって多くの人に届くことになりました。

### (2) 採用革命 ～県外からも若者が集まる職場へ～

SNSの効果は、認知拡大にとどまりませんでした。動画をきっかけに、「ここで働きたい」「ものづくりに携わりたい」といった問い合わせが若者を中心に相次ぐようになりました。数ヶ月で寄せられた問い合わせは約50件ののぼり、その結果30名以上の新たな仲間を迎えることが出来ました。応募者は地元に限らず、伝統工芸の魅力に惹かれ、移住を決意した県外の若者も多く含まれています。

SNSというツールは、後継者不足に悩む地方のものづくりと、意欲ある若者を結ぶ「現代の架け橋」となり、当社の未来を支える大きな力となっています。

## ◆従業員が働きやすい環境づくり

### (1) 昭和から令和へ ～「ホワイト」な働き方改革の推進～

当社では、人材を「集める」だけでなく、「定着させる」ことを重視し、働きやすい職場環境整備に継続的に取り組んでいます。長時間労働が当たり前とされてきた、いわゆる「昭和の働き方」から脱却し、無理なく長く働ける職場づくりを目指してきました。

その一環として、完全週休二日制の導入や有給休暇の取得推奨、給与ベースの引上げを実施。さらに、3年後を目標に週休三日制の実現にも挑戦しています。

また、日々の働きやすさを高めるため、休憩室へのティーサーバー設置をはじめ、レクリエーションや社員旅行の実施、「旅こそが最大の教養」という考えのもと、会員制ホテルの会員権取得や旅行手当の支給など、細やかな福利厚生の実施にも力を入れています。

### (2) アナログからデジタルへ

組織の拡大に伴い、バックオフィス業務のDX（デジタルトランスフォーメーション）にも着手しました。かつてはすべての伝票を手書きで処理していましたが、「IT導入補助金」を活用し「奉行クラウド」を導入したことで、事務作業の負担が大幅に軽減され、業務効率の向上につながっています。また、以前は社内にはパソコンが1台しかなく、日報もノートへの手書きで管理していましたが、現在はPCの台数を増やし、日報や各種データのデジタル化・見える化を進めています。

一方で、給与明細を手書きに近い形式で印刷し、封筒に入れて配布するなど、アナログな業務も一部残っています。今後は、タブレットによる勤怠管理や給与明細のメール配信などへの移行を検討していますが、従業員数に対するシステム導入コストとのバランスが現在の課題となっています。

## ◎経営していく上で大切にしていることはありますか？

### ◆「仕事のために生きるな、人生を楽しむために働く」

私が経営において、大切にしていることは、大きく3つあります。

1つ目は、「仕事をして終わるだけの人生ではなく、人生を楽しむためにこそ仕事がある」という考えです。作り手が疲弊しては、人の幸せを願う「お守り」は作れません。社員一人ひとりがプライベートを大切に、心身ともに健康で働ける環境があってこそ、温かみのある良質な「さるぼぼ」が生み出されると考えています。

2つ目は、「常にポジティブに、前向きな向上心を持って、PDCAサイクルを回し続ける」ことです。ネガティブな言動や思考は、職場の空気を停滞させ、新たな挑戦の芽を摘んでしまいます。困難な局面に直面したときこそ、「どうすればできるか」「次はどうすればもっと楽しませられるか」と発想を転換することが重要です。私自身が率先して明るいビジョンを語り、笑顔でいることで、社内には「失敗を恐れず挑戦する風土」が育まれてきました。社長が不在でも自律的に機能する組織を目指し、3年かけて仕組みづくりを進めた結果、各部署の強化と社員の自立・成長につながっています。

3つ目は、「もし当社より良い条件の会社があれば、そこへ行っても構わない。しかし、そう言わせないほど良い会社にする自信がある」と、社員に胸を張って言える経営を目指すことです。伝統産業だから、地方だからといって妥協するのではなく、社員一人ひとりが「この会社で働いていることが誇りだ」と思える企業であり続けること。それこそが、これからの時代に、求められる経営だと考えています。

## ◎組合に期待することは何ですか？

### ◆競争から共創へ

かつては、地域の業者同士が競い合う時代もありましたが、現在では約70社が手を取り合う「チーム飛騨」としての体制が整いつつあります。

私が組合に期待していることは、加盟企業一社一社が「共存共栄」を実現することです。一部の企業だけが利益を得るのではなく、地域全体で品質を守り、適正な価格を維持する。その積み重ねこそが、さるぼぼの文化を次世代へとつないでいく力になると信じています。

## ◎御社の今後の展望、抱負をお聞かせください。

### ◆「知られていない」は「伸びしろ」

今後の展望は、さるぼぼのさらなる知名度向上です。現在、さるぼぼの認知度は全国的に見ても約4割程度にとどまっています。海外に目を向けると、その存在を知らない方がほとんどです。しかし裏を返せば、それはまだ6割以上の「伸びしろ」が残されているということでもあります。

私自身が個人的にライバル視している民芸品に「あかべこ」があります。あかべこは、さるぼぼと同じく地域の伝統工芸品でありながら、今や誰もが知る存在となっています。今後は、さるぼぼも同様に広く知られる存在となるよう、現在運用しているSNSアカウントをさらに育て、ファンの拡大を図っていきます。「さるぼぼに会いに、そして買いに高山へ行く」。そんな動機づくりを通じて、認知の裾野を広げていきたいです。

また、海外の方々にも受け入れられる実用性の高い商品開発を進めることで、さるぼぼを「世界に愛されるラッキーチャーム（幸運のお守り）」へと育てていくことも大きな目標です。さるぼぼが高山の観光と地域経済の発展を支える存在となるよう、今後も挑戦を続けていきます。

### 【組合概要】 飛騨のさるぼぼ製造協同組合

組合住所 岐阜県高山市本母町450番地2 有限会社愛和工芸 内

代表理事 森林 三樹夫 (有限会社愛和工芸)

組合員数：3名

主な事業：共同販売事業、共同宣伝事業

※組合員企業の掲載希望がございましたら、企画振興部までお知らせください。

## 今をどう見る～生き残りツールとしての情報

このコーナーでは、神戸国際大学経済学部 中村智彦教授より折々に感じておられる組合・中小企業向けの有益な情報についてご執筆いただきます。組合運営、企業経営にお役立てください。

### 次世代の若手経営者をどう育てるか

#### ◆若手経営者候補を講義に招いた理由

今年度、大学の講義に経営者のみなさんを招き、実体験を語っていただくという試みを行いました。教科書的な知識ではなく、現場で起きている現実を学生たちに伝えたいと考えたからです。

その中で、私が顧問を務める若手経営者の会である京都機械金属中小企業青年連絡会（機青連）から、2名の若手経営者候補に来ていただきました。

経営者のみなさん、特に中高年の方々の中には、講演やプレゼンテーションに慣れ、話し方も洗練された方が多くいらっしゃいます。しかし今回は、あえてそうした経験の少ない若手をお願いしました。

理由は二つあります。一つは、学生たちの年齢に近い若手が自身の経験を語ることで、中小企業の経営や経営者の考え方をより身近に感じてもらうため。もう一つは、講師となる若手経営者候補自身にとっても、自らの立場や考えを言語化する新たな挑戦の機会にしてもらうためです。

#### ◆後継者難が進める中小企業の消失

現在の日本では、中小企業が非常に速いペースで減少しています。帝国データバンクによると、2025年1～8月に全国で休業・廃業、解散を行った企業（個人事業主を含む、以下「休廃業」）は4万7,078件となりました。前年同期を9.3%上回り、3年連続の増加です。

2024年以降、休廃業・解散件数は増加ペースを早めており、年間では現行基準で集計を開始した2016年以降

で最多だった前年を上回り、初めて年7万件台に達する可能性がありますとされています。

特徴的なのは、赤字倒産だけでなく、黒字経営でありながら廃業を選択する企業が増えている点です。これは「あきらめ廃業」と呼ばれ、後継者不在が大きな要因となっています。

一方、2025年1～9月の「後継者難」倒産（負債1,000万円以上）は332件と、前年同期を下回ったものの、過去2番目の高水準です。

M&Aによる事業承継も増えていますが、多くの経営者にとっては、やはり子どもや親族に会社を継いでほしいという思いが根強いのではないのでしょうか。

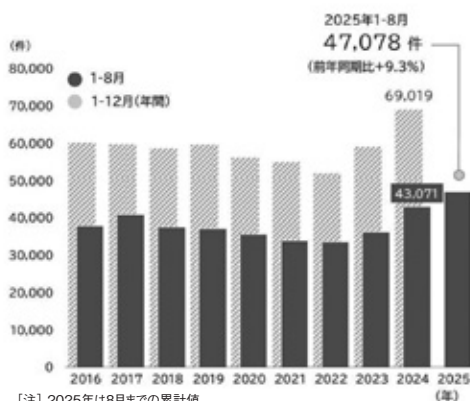
#### ◆後継者に対するそれぞれの思い

今回、講義に出講して下さった2名はいずれも30歳代でした。ただし、その歩んできた意識には大きな違いがありました。一人は子どもの頃から家業の後継者になることを当然のように意識してきた人、もう一人は、後継者になることを考えておらず、むしろ避けたいと思っていた人です。

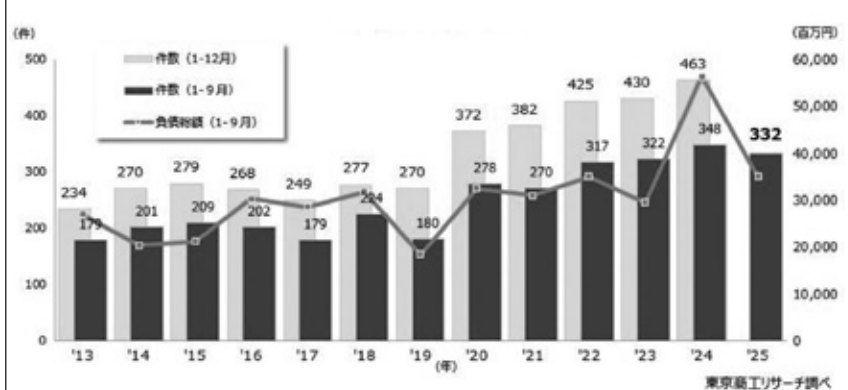
講義後のアンケートでは、「いつ後継者になると決意したのか」という点に学生たちの関心が集まっていました。

実家が自営業や中小企業経営であっても、すべての子どもや親族が自然に事業承継を意識して育つわけではありません。この点は、多くの中小企業経営者にとっても、改めて考えさせられる部分ではないのでしょうか。

年別休廃業・解散件数 推移



「後継者難」倒産推移



## ◆後継者候補が抱える葛藤

子どもの頃から事業承継を意識していたという方は、その理由を「洗脳ですかねえ」と冗談めかして語っていました。祖父が創業し、父が継承した家業を、将来は自分が引き継ぐのだと、繰り返し周囲から言われてきたそうです。

しかし同時に、「今から考えると、何も深く考えていなかったのかもしれませんが。」とも話していました。

事業承継が現実味を帯びてくるにつれ、「後継者としてどうあるべきか」「自分は経営者に向いているのか」といった葛藤が生まれてきたと言います。

「後継者として恥ずかしくないように、勉強もスポーツも頑張っても、『さすが三代目だ』と言われる。父が非常に優秀な経営者なので、努力しても、できて当たり前と思われてしまうのです。」

優秀な後継者候補という立場を守ることも、他人から見ると辛いこともあるわけです。

## ◆外で働いて初めて得た視点

もう一人は、大学卒業後に就職した企業での経験を、率直かつユーモラスに話してくれました。

高い給与に惹かれて就職したものの、休日はほとんどなく、深夜まで残業が続く職場だったそうです。給与は良かったものの、使う時間もなく、同期は次々と退職し、自身も心身の限界を迎えました。

「とにかく転職したい一心で、父の会社に入社しました。後継者というより、転職できたという安堵感の方が大きかった。」

結果として、「働く側の立場で、ワーク・ライフ・バランスの重要性を実感できた」と語っていました。

二人とも、大学卒業後に一度は外部企業で働いており、「従業員としての視点」を事前に理解しておくことの重要性を強調していました。

## ◆あいさつに表れる後継者の覚悟

二人に共通していた重要なキーワードが「あいさつ」でした。

「こちらはそのつもりがなくても、周囲は次期社長として見てきます。下手をすると、本来入ってくるはずの情報が入らなくなる。だからこそ、新人として率先してあいさつすることから始めました。」

経営者候補として見られていることを自覚した行動が、信頼関係づくりの第一歩になると、二人とも語っていました。

## ◆後継者候補が抱える孤独

講義後、個別に話を聞いていて強く感じたのは、後継者候補が抱える孤独感です。

同世代の多くが会社員としてキャリアを積み途中で、後継者候補は「いずれ会社を継ぐ存在」として見られ、進路や行動の自由度に制約を感じやすい立場にあります。

家業の経営、親との関係、従業員との距離感といった悩みは、会社員が多い同世代の友人にはなかなか理解されません。「同じ悩みを共有できる相手がいない」という声は、決して珍しいものではありません。

## ◆第三者と学び合う場の重要性

先代社長から学ぶことは多いものの、親子関係ゆえに率直に相談しにくいテーマもあります。学生からのアンケートの記述でも、将来の後継者候補である複数の学生が、「これまでちゃんと親と仕事について話してこなかった」、「同じような立場の方の話が聞けて、自分の将来を考えることができた」といった感想が述べられていました。

だからこそ、第三者として経営について助言してくれる存在や、同じ立場の若手経営者同士が学び合える場が重要になります。

岐阜県中小企業団体中央会でも、若手経営者や後継者候補を対象とした勉強会や交流の場が用意されています。こうした場は、単なる知識習得にとどまらず、将来にわたって相談できる仲間を得る貴重な機会です。

## ◆先代経営者に求められる役割

最後に強調したいのは、父親や先代社長の姿勢です。

後継者候補が真剣に経営を学ぶ場に参加することを認め、後押しすることは、短期的には負担に見えても、長期的には必ず企業の力になります。

次世代の若手経営者を育てるとは、知識やノウハウを教え込むことではありません。学び、悩み、成長できる環境を整えることです。その積み重ねこそが、地域の中小企業を未来へとつないでいくのだと、今回の講義を通じて改めて感じました。



中村 智彦  
(なかむら ともひこ)

【ホームページ】 <http://monodukuri.jp/>

【常勤】 神戸国際大学経済学部 教授

【非常勤】 関西大学商学部 非常勤講師・愛知工科大学工学部 非常勤講師

【専門】 中小企業論・地域経済論

【略歴】 昭和39年 東京都生まれ

昭和63年 上智大学文学部卒業

平成12年 名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程修了（学術博士・名古屋大学）

【活動】 総務省地域創造力アドバイザー・京都府向日市ふるさと創生計画委員会座長  
東京都北区ネスト赤羽支援機能拡充検討委員会座長・山形県川西町第5次総合計画アドバイザー  
ヤフー! ニュース <https://news.yahoo.co.jp/byline/nakamuratomohiko>

## 会長新春インタビュー

あけましておめでとうございます。年頭にあたり会員の皆様方に謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

去年は、本会において創立70周年という大きな節目の年でした。長きにわたり本会を支えてくださった会員の皆様、ならびに関係機関の皆様の多大なるご支援とご協力の賜物と、改めて心より厚く御礼申し上げます。

国内経済は、米国トランプ政権の施策や為替変動、地政学的リスクの高まり、原材料やエネルギー価格の高騰、そして構造的な人手不足が中小企業の経営を圧迫し続けています。加えて、金利も上がってきています。

また、事業承継による世代交代の動きも活発化していますが、課題も多く、今後2～3年は重要なテーマであり続けると認識しています。

変化の激しい時代において、中小企業が生き残るためには、決して派手さはありませんが、長年の経験や実力をもつ「いぶし銀」のような中小企業が増えていくことが重要で、時に岐阜県ではそれが大きな売りになると思います。そのために経営者は、日々勉強し、何が問題であるか考えることが不可欠です。また、人手不足は難しい課題ですから、人財を大切にし、誰もが安心して働ける「あったか・ほんわか経営」が求められていると感じます。

こうした中、賃上げと価格転嫁の好循環を定着させることが急務であり、単なる人手不足の穴埋めにとどまらず、DX・AI・ロボットの現場実装による抜本的な生産性向上や、脱炭素社会に向けたGXへの対応が、企業の存続・成長を左右することになります。

本会は、中小企業連携組織の専門支援機関として、新年度は「省力化投資の促進」や「DX・AIの活用」、そして「女性経営者の活躍推進」などを強化テーマに掲げ、自己変革に挑戦する組合・中小企業の皆様に強力に支援してまいります。

本年は、中小企業が国の礎としての役割を果たし、未来に発展していくための「ターニングポイント」となる重要な一年です。組合・中小企業の皆様にとって、飛躍の年となりますことを心からお祈り申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。



新春インタビューに答える傍島会長

『連携の力で無限の可能性にチャレンジ！』

～中央会は、組合・中小企業の変革・挑戦を応援します～

## DX成功に必要なノウハウを学ぶ「現場見学会」を開催

中央会は、「DX成功に必要なノウハウを聞いて見て学ぶ」をテーマとした現場見学会を11月14日に開催し、組合員企業などから12名が参加した。

本見学会は、DX先進企業の現場見学により、DX推進の背景や成功の秘訣といった実践的な知見を共有することを目的としており、DXセレクション2025の優良事例に選定されるなどDXにより企業の革新と成長を加速させている「株式会社HIGUCHI(各務原市)」を訪問した。

講演に登壇した樋口徳室社長は、外部ベンダーに丸投げするのではなく、社内人材である「ブリッジエンジニア」を中心とした「身の丈DX」を実践してきた経緯を説明。「米国工場の立ち上げを全て自力でやり遂げた経験から、DXも『自分たちでやる』と決意した」と当時を振り返った。

また、こうした取組みを重ねる中で、製造現場のみならず経理部門のメンバーまでもが自らデータを分析し、業務改善に活用する文化が醸成された点にも触れ、「これこそが『人と業務文化のトランスフォーメーション』である」と強調し、人材確保が困難な中小企業こそ、社内人材を育成して自ら変革し続けることが、次代を勝ち抜く鍵であると訴えた。

続いて行った工場見学では、社内で開発・運用されているシステムや、現場とバックオフィスのデータ連携の様子を見聞し、参加者はペーパーレス化やIoT活用の実態を目の当たりにし、その管理手法や導入効果について熱心に確認していた。



現場見学会の様子

## 価格転嫁と団体協約の実践セミナーを開催

中央会は、11月20日にホテルグランヴェール岐山及びオンライン配信により、「価格転嫁と団体協約の実践セミナー～原価上昇に立ち向かう中小企業の知恵と戦略～」をテーマとしたセミナーを開催し、合計13名が参加した。

本セミナーは2部構成で実施。第1部では「価格転嫁を成功させる実践セミナー～適正な利益を確保するために～」をテーマに、仲田俊一中小企業診断士事務所代表の仲田俊一氏が講師を務めた。第2部では「団体協約の基礎と活用術」をテーマに、全国中小企業団体中央会政策推進部長の鮎川尚之氏が講師を務めた。

参加者からは「今後の価格転嫁や価格交渉に向けて大いに参考になった」との声が寄せられた。また、独占禁止法では情報交換による協調行動は違反となる一方、中小企業等協同組合法に基づく団体協約は独禁法の適用除外となる点について、「曖昧な認識が明確になった」「自組合でも有効活用できるか検討したい」等の声が聞かれた。



セミナーの様子

## 女性部等活動支援研修会を開催

中央会と岐阜県中小企業団体中央会レディースクラブ(谷田育子会長)は、11月25日、ホテルグランヴェール岐山にて「しなやかに変わり続ける力 ー共に考え、共に動く組織を目指してー」をテーマに研修会を開催し、12名が参加した。

講師の株式会社杉山製作所 島田亜由美社長は、創業62年の同社が自動車部品の下請けから独自の鉄家具ブランドへ事業転換を成功させた経験を語った。

島田社長は、自動車部品事業の縮小を機に自社製品開発へ転換する際、製品力向上より先に「働く環境」整備を優先。全社員による「10年後の工場を考える会」を発足させ、工場内ショールームを設置して「働くことを魅せる工場」として公開するなど、意識改革に注力した。

製品開発では、外部デザイナーを交えた全スタッフ参加型ワークショップを隔月開催し、多様な視点を取り入れた。こうした取り組みを5年、10年と継続した結果、社員が主体的に参加する文化が定着したという。業務の標準化や未来創造に向けた会議体の整備など、やりがいのある仕事づくりの具体例の説明が行われた。

講演後の懇談会では、参加者と講師が経営課題や工夫について活発に意見交換し、実りある研修会となった。



説明を行う島田講師

## 中小企業の官公需確保を目指しフォーラムを開催

中央会と岐阜県建設関連業団体部会（荒川晶一部会長）は、中小企業の官公需確保支援を目的として11月27日に「県官公需フォーラム」をホテルグランヴェール岐山で開催し、部会員24名が参加した。

県担当者との懇談会では、県担当者14名が出席し、荒川部会長並びに県土整備部の飯島竜二土木技監があいさつ。続いて、事前に提出した要望に対する回答があった。

県議会幹部議員との懇談会には、広瀬修総務委員長、所竜也企画経済委員長、恩田佳幸厚生環境委員長、布保正也農林委員長、藤本恵司土木委員長、今井政嘉教育警察委員長、森正弘自由民主党岐阜県連政調会長、猫田孝自由民主党岐阜県連会長代行（本部会顧問）が出席した。

部会員のうち12組合等が地元業者への受注機会の増大や、物価高騰や賃上げを踏まえた適正価格での発注、働き方改革を意識した工期設定等について直接要望し、出席議員より要望に対する所見が述べられた。



フォーラムの様子

## 外国人技能実習制度適正化講習会を開催

中央会は、12月1日に「外国人技能実習制度適正化講習会」を開催し、ホテルグランヴェール岐山会場及びオンライン合わせて65名が参加した。

本講習会では、「外国人技能実習制度の現状と監理団体の今後のあり方について」をテーマに、Linolaパートナーズ法律事務所 代表弁護士 片岡邦弘氏が講師を務めた。

講演の中で片岡氏は、令和7年における技能実習制度運用要領の改正ポイントについて解説した。あわせて、育成就労制度の詳細が未だ固まっていない現状を踏まえ、「新制度となっても現在の外国人技能実習制度の枠組みが維持されており、今後の制度移行を見据えつつも、まずは足元のルールを徹底することが重要である」と述べた。



講習会の様子

## 「2026年施行 カスハラ対策制度改正セミナー」を開催

中央会は、12月3日にホテルグランヴェール岐山及びオンライン配信により、「『2026年施行 カスハラ対策制度改正セミナー』～中小企業・協同組合に求められる準備と対応～」をテーマとしたセミナーを開催し、合計15名が参加した。

講師を務めた社会保険労務士法人ASADAYACREATE代表の吉岡かおり氏は、「パワハラやセクハラは減少傾向にあるのに対しカスハラは増加傾向である。カスハラ対策は努力義務から法定義務へ移行する事が決定しており、従業員と会社を守る為にも、早期の対策と準備が不可欠である」と説明した。

本セミナーは、制度改正による施行日が公布されて間もない時期の開催であったため、最新情報をいち早く収集でき、2026年の義務化を見据え、準備期間を確保できると好評であった。



セミナーの様子

## 健康経営の普及促進並びに健康づくりの推進に向けた連携協定を締結

中央会は、12月3日に本会事務所において全国健康保険協会（協会けんぽ）岐阜支部と「健康経営の普及促進並びに健康づくりの推進に向けた連携協定」を締結した。

本協定は、2者が相互に連携・協力を行い、健康経営の普及促進並びに健康づくりの推進に向けた取り組み等を通じて、中央会の会員組合・組合員企業を中心とした県内事業所の事業主及び従業員とその家族の健康的な生活の実現を支援し、健康経営を通じた経営力の強化を図ることを目的とするものである。

締結にあたり、川本専務は「中小企業が直面する最大の課題の一つである人手不足を乗り越えるためには、貴重な人財に長く働いていただき、働く意欲を高めていくことが不可欠である。そのためには、事業所が従業員の健康を管理し、健康で働ける職場環境を整備する健康経営の取り組みが重要である。今回の協定締結を機に、会員組合及び組合員企業の多様なニーズに対し、双方が連携して取り組むことで、健康経営を通じた経営力強化に相乗効果を発揮していきたい。」と述べた。

また、全国健康保険協会岐阜支部の豊田支部長は「健康経営の普及や健康診断等の受診促進には、協会けんぽ単独でできることに限界がある。その中で、中央会と連携することにより、組合を通じて中小企業へ働きかけや支援を行うことができ、大変有意義である。企業が従業員の健康を“経営資源”として捉え、中央会との連携を通じて、中小企業への健康経営の普及と健康増進をより力強く推進していきたい。」と述べた。



締結の様子（川本専務(左)と豊田支部長(右)）

## 県中小企業組合士協会が先進事例視察研修を実施

県中小企業組合士協会（高橋淳会長）は、12月4日・5日に先進事例視察研修を行い、会員6名で岐阜県飛騨地域（高山市・飛騨市）を訪問した。

1日目は、飛騨杉研究開発協同組合（高山市）を訪問し、組合概要等の説明を受けた後、組合員である飛騨産業株式会社を視察した。同組合では、家具製品には不向きとされてきた杉材の活用を目的に熱圧縮技術を開発しており、この圧縮材を同社が家具製品として実用化している。

2日目は、岐阜県が作成した「『働いてもらい方改革』優良事例集」に掲載されている株式会社飛騨ダイカスト（飛騨市）を訪問した。パート社員を廃止し、全員を正社員として雇用するなど、女性社員の定着につながる取組みについて説明を受けた。

参加者からは、「例年は県外での視察が多かったが、岐阜県内にも先進的な事業者が数多く存在することが分かった。今回の視察で得た知識や情報を、今後は組合員にも広く展開していきたい」との声が聞かれた。



工場内（飛騨ダイカスト）を見学する様子

## 労働系助成金活用セミナーを開催

中央会は12月11日、OKBふれあい会館において「労働系助成金活用セミナー」を開催し、8名が参加した。講師として松本社会保険労務士事務所代表の松本慎二氏を招き、急速な賃金上昇や人手不足の状況下において、人材確保や処遇改善に活用が期待される「業務改善助成金」および「キャリアアップ助成金」について解説が行われた。

業務改善助成金について、最低賃金の近くで働く従業員の賃上げと、生産性向上に資する設備投資や業務改善を一体的に実施する事業場を支援する制度であることが説明された。同助成金は事業場単位で申請が可能であり、中小企業や個人事業主を主な対象とし、外国人技能実習生やアルバイトも対象となる場合がある点が紹介された。

キャリアアップ助成金について、有期雇用労働者やパートタイム労働者などの非正規雇用者を正社員へ転換するほか、待遇改善を行う事業主を支援する制度であることが説明された。

参加者からは制度の内容や具体的な活用方法について理解が深まったとの声が聞かれた。



セミナーの様子

## 中央会活動

### 組合役員・事務局スキルアップ講座を開催

中央会は、組合役職員を対象とした「組合役員・事務局スキルアップ講座」(全3回・3テーマ:「組合制度」「組合運営」「組合会計」)のうち、「組合制度」を12月16日、「組合運営」を12月24日に、ホテルグランヴェール岐山およびオンライン配信により開催した。

#### 第1回「組合制度」(12月16日)

中央会職員が講師を務め、会場およびオンラインを合わせて31名が参加した。「組合運営の実務ポイントとスキルアップのすすめ」をテーマに、総会議案書における指摘事項の事例紹介や、定款変更に関する手続きおよび留意点について解説を行った。

#### 第2回「組合運営」(12月24日)

明治大学政治経済学部森下正教授を講師に迎え、会場およびオンラインを合わせて18名が参加した。前半では「組合の役割と役員への心構え」をテーマに講義が行われた。後半では「魅力ある組合づくりとは?」をテーマに、岐阜県眼鏡商業協同組合 代表理事・宇佐見潤氏、岐阜県舞台設備管理事業協同組合 代表理事・元林秀幸氏を講師として招き、「組合による知的財産の保護」や「人材育成」等について、パネル形式による講演が行われた。



第1回「組合制度」の様子



第2回「組合運営」の様子

## 組合等活動

### ぎふの『栗』おやつマルシェに出展

岐阜県菓子工業組合(澤田誠理事長)

10月11日から13日まで岐阜シティ・タワー43において、「ぎふの『栗』おやつマルシェ」が開催された。

同マルシェは、岐阜県菓子工業組合が立ち上げた「岐阜おやつ編集室」が企画段階から企画したもので、組合員の和菓子店11店が出展。編集室ブースではさらに11店の商品を取り扱い、今回は洋菓子店も初めて参加した。12日には城南高等学校が全国和菓子甲子園で優勝・準優勝を獲得した作品2点を詰め合わせた限定80箱を販売。好評を博し、完売となった。また購入した商品を手軽に楽しめる休憩スペースも設置され、来場者の利便性も高めた。昨年に引き続き、県内12店の栗きんとんを食べ比べできる「栗きんとん食べ比べボックス」も3日間限定で販売。こちらも連日完売の人気ぶりを見せた。

常川智子事務局長(編集長)は「会場を岐阜シティ・タワーに移したことで、多くの来場者で賑わい、行列もできる盛況ぶりでした。また、組合員も和菓子を中心とした大きなイベントに出展することができ、大変喜んでいただけた。」と思いを語った。



会場の様子

### 「GIFUクラフトフェア2025」に出展

岐阜県印刷工業組合(大洞正和理事長)

岐阜県印刷工業組合は、10月12日から13日にJR岐阜駅アクティブGで開催された「GIFUクラフトフェア」に出展し、2日間で224名の参加があった。

GIFUクラフトフェアは、全国から多彩なジャンルの作家が集い、木工や陶芸、ファッションアイテムなどの作品に触れられるほか、ワークショップを通じてモノづくりを体験できるイベントである。

同組合のイベント出展は今回で2回目となり、ブースでは前回同様の「お絵かきペーパークラフト」体験に加え、新たな試みとして「印刷用紙の無料配布」を実施した。これは、組合員企業で発生した余剰用紙を有効活用し、来場者に「おすそ分け」する企画である。

当日は親子連れだけでなく、大学生や主婦層など幅広い世代がブースを訪問。ペーパークラフト作りを楽しむ姿や、質の高い印刷用紙を手に取り、その活用法に思いを巡らせる女性客の姿が多く見られた。

今回の出展について、四ツ橋憲彦事業委員長は「多くの来場者に、紙の持つ風合いや印刷業界の魅力について直接PRすることができた。今回得られたフィードバックを検証し、今後の組合事業の発展につなげていきたい」と手応えを語った。



ぬりえ体験に参加する親子

## 組合等④活動

### ぎなんフェスタ2025に出展

赤帽岐阜県軽自動車運送協同組合（西垣内巧理事長）

赤帽岐阜県軽自動車運送協同組合は、10月19日に岐南町役場・JAぎふ岐南支店一帯にて開催された「ぎなんフェスタ2025」に、地域貢献の一環として出展した。

地域密着の運送業として、住民とのふれあいを大切にする同組合。今回は「マルシェエリア」にブースを構え、「赤帽輪投げゲーム」を行い、参加者にお菓子やオリジナル販促品の配布を実施。ブースは終日、多くの家族連れや地域住民で賑わいを見せ、組合の存在と活動を広くアピールする絶好の機会となった。

西垣内理事長は「多くの笑顔に触れ、地域との絆を再確認できた一日でした。今後もこうした活動を通じて、地域の皆様に愛される赤帽を目指します」と語った。



ぎなんフェスタの様子

### 朝市収穫祭を開催

飛騨高山宮川朝市協同組合<sup>たんなか</sup>（反中正人理事長）

飛騨高山宮川朝市協同組合は、今年も11月23日に高山市内で「朝市収穫祭」を開催した。

この収穫祭は、豊かな実りと収穫への感謝を伝える場として10年以上にわたり親しまれており、新鮮な野菜などが特別価格で提供される年に1度の恒例行事となっている。

当日は、豪華景品が当たるくじ引きや、高山市長をはじめとする関係者による農産物の品評会および表彰式が執り行われた。「赤かぶ賞」や「白菜賞」などの各賞に加え、「ユニーク賞」には大阪・関西万博の公式キャラクター「ミャクミャク」を彷彿とさせるジャガイモが選出され、来場者の注目を集めた。



朝市収穫祭の様子

品評会で表彰された野菜をはじめ、赤かぶや飛騨りんごなどの農産物が格安で店先に並び、販売開始からわずか30分ほどで完売となった。会場は氷点下の冷え込みを感じさせないほどの熱気に包まれ、多くの地元住民や観光客で終始賑わいを見せた。

反中理事長は「品評会では、朝市の出店者にとって農産物を作る励みとなり、来年も頑張ろうという気持ちになってくれれば嬉しい」と、生産者への期待と今後の抱負を語った。

### 手作り手帳ワークショップの実施、第40回尾張名古屋の職人展に組合が協力参加

岐阜県製本紙工工業組合（樋口孝理事長）

岐阜県製本紙工工業組合は、11月24日にモレラ岐阜で「手作り手帳ワークショップ」を開催した。

ワークショップでは、1級製本技能士の指導のもと、参加者が好みの布を選び、2026年版の手帳を手作業で製本した。子どもから大人まで幅広い年代から多くの参加があり、製本の奥深さに触れる貴重な機会となった。

樋口理事長は、「日常で長く使ってもらえるように、スケジュール帳にはペン差しなどもあわせて作ることでより実用的なものにし、参加者からは好評であった。モレラ岐阜において組合単独でワークショップを開催するのは初めての試みであったが、多くの人に製本について興味を持ってもらえ、組合や業界のPRになった。」と話した。

また、10月18・19日に名古屋市のおアシス21で開催された「第40回尾張名古屋の職人展」に出展した愛知県製本工業組合に協力参加した。

出展ブースでは、御朱印帳の展示・販売のほか、来場者に御朱印帳づくりを体験してもらい、製本の仕組みへの理解を深めた。



ワークショップの様子

組合では伝統的な製本技術を次世代へ伝える取組みを今後も積極的に展開していく。

## 「マテセンコレクション2025 ~電車内・駅でのファッションショー!~」、 「学生向け企業PR」を初めて開催

岐阜県毛織工業協同組合（岩田考司理事長）

岐阜県毛織工業協同組合は11月8日、羽島市を含む尾州産地の魅力を発信するファッションショーを初めて開催した。会場は名鉄竹鼻線の笠松駅・新羽島駅構内、停車中の電車内、岐阜羽島駅コンコース、そしてぎふ羽島駅前フェス特設ステージと、多彩な場所で展開された。

このファッションショーは、若い世代に尾州のものづくりに触れてもらい、地元の魅力を再認識してもらうことを目的としている。マテセン研修会の学生モデルを中心とした計30名が参加し、尾州ファッションデザインセンター所蔵の若手デザイナー等による作品60点を披露した。

さらに12月8日には、岐阜毛織会館およびテキスタイルマテリアルセンターにて、初の「学生向け企業PR」イベントを実施。就職活動を控えた学生を対象に、6企業のPRブースを設置し、尾州の最新生地や岐阜のアパレル企業を紹介した。イベント後には、元『装苑』編集長の児島幹規氏によるセミナーも開催された。

同組合の山田専務理事は、「ファッションショーを通じて尾州産地の高質な素材を知ってもらい、地元の魅力を再認識していただければ」と期待を語った。



電車内でのファッションショー

## 組合青年部が出前授業を実施

多治見地区電気工事業協同組合青年部（藤本雄太会長）

多治見地区電気工事業協同組合青年部は、12月11日、将来の業界を担う人材育成を目的として、県立多治見工業高校において恒例の出前授業を実施した。今回で9回目となる同授業には、電気工学科2年の生徒39人が参加した。

出前授業では、高所作業車の操作や壁面への穴あけ作業、配管曲げなどの実習に取り組んだ。意見交換も行われ、生徒たちからの、有給休暇の取得や業務の危険性についての質問に青年部員が率直に回答した。最後に、青年部員による引き込み工事の実演で外灯が点灯すると、生徒たちから歓声が上がった。

藤本会長は「今回、短い時間であったが実際の電気工事の仕事に触れて頂いた。少しでも電気工事という職業に興味を持ってもらい、将来、電気工事業界に就職していただきたい。今後もこのような機会を継続的に実施して業界を盛り上げていきたい。」と語った。



出前授業の様子

## 多治見・土岐で「美濃焼新春見本市」を開催

岐阜県陶磁器工業協同組合連合会（松原朝男理事長）

岐阜県陶磁器工業協同組合連合会所属の12組合は、1月8日・9日に、多治見市の「セラミックパークMINO」及び土岐市の「セラトピア土岐」の2会場で開催された「美濃焼新春見本市」を開催した。

本見本市は各組合の陶磁器メーカーが商社やバイヤーなどに向けて、その年の新作や一押し商品を披露する商談の場として、産地組合が連携し毎年開催している。

多治見会場では、多治見市と瑞浪市の6つの陶磁器工業協同組合の組合員41社が出展。土岐会場では、6つの陶磁器工業協同組合の組合員83社が出展し、両会場とも活況を呈した。

会場には、伝統的な技術を生かしつつ、現代の多様なライフスタイルや市場ニーズに対応した意欲的な新製品が数多く出品され、特に今年は抹茶ブームで注目を集めている抹茶わんなども多く並び、訪れた関係者の注目を集めていた。

土岐会場を運営する土岐市陶磁器工業協同組合連絡協議会の熊谷会長（妻木陶磁器工業協同組合理事長）は、「今年も美濃焼の特徴である、実用性が高くデザインとバリエーションに富んだ新商品が数多く並んでいる。特に世界的な抹茶ブームによる商品が並ぶなど、インバウンドのお客様に和を感じていただける商品が増えた。見本市は、今まで取引のなかった商社の方と出会えるチャンスであり、引き続き他組合の方と連携して継続開催し、美濃焼産地を盛り上げていきたい。」と述べた。



土岐会場の様子



全国の先進組合事例を収集した「先進組合事例抄録（令和6年度組合資料収集加工事業報告書）」より抜粋して紹介します。先進組合事例抄録は過去のものを含め全国中央会のホームページ上で「組合事例検索システム」で公開していますのでぜひご活用ください。「組合事例検索システム」<https://www.chuokai.or.jp/index.php/jireisearch/>

## 西尾茶協同組合

連携を鍵に「西尾の抹茶」を国内外にプロモーション

主な業種	工芸農作物農業、製茶業、茶類卸売業又は茶類小売業				
住所	〒445-0852 愛知県西尾市花ノ木町4-64 西尾コンベンションホール内				
URL	<a href="https://nishiomatcha.jp">https://nishiomatcha.jp</a>				
設立	平成19年6月	組合員	47人	出資金	1,480千円

### ■ 背景・目的

愛知県西尾市と周辺地域の特産品である「西尾の抹茶」は、日本でも有数の良質な抹茶として各品評会で高く評価されている。しかし長年、茶道用の抹茶としての需要が高かったことから他産地と比べると一般的に知名度が低く、ブランド力の弱さが課題だった。そこで、産地間競争に負けないよう茶業関係者等が結束して協同組合を設立し、地域団体商標登録制度を活用した「西尾の抹茶」の知名度アップと付加価値向上を目指す取組みが開始された。

### ■ 取り組みの手法と内容

地域ブランド取得により、組合員が統一のブランドマークを使用できるようになったことで「西尾の抹茶」の広告宣伝効果が上がり、消費者の認知度を高めることができた。海外では「NISHIO MATCHA」などとして10か国の地域で商標登録を行い、40か国以上に輸出実績がある。地域ブランド取得の際には、組合員の意見の取りまとめに苦労したが、理事長の強いリーダーシップの下、事務局長が推進役となり組合員との関係構築と結束力強化に努めた。ブランド使用については地域を限定し、その加工方法に厳しい基準を設け、定義を厳格にしたことで組合員の商品の品質は向上し、それまで茶道の用途とされてきた抹茶をアイスクリームやスイーツ等の食品加工用原料として販売したことで更に活路が広がった。以降「西尾の抹茶」が抹茶ブームを牽引することとなり、大手食品メーカーが産地名を全面に押し出した商品を販売するまでになった。近年は人気YouTuberや料理研究家とコラボレーションした動画を配信する等、あらゆる世代に向け「西尾の抹茶」の魅力発信を行っている。また異業種との連携にも積極的に挑戦し、廃棄される茶葉の破片から作る安心・安全のクレヨンや西尾市観光協会と協力したフルーティー抹茶等、新商品開発にも組合主導で取り組んでいる。

### ■ 成果とその要因

地域ブランド取得と国内外への積極的なプロモーションに成功したことで「西尾の抹茶」の知名度は確実に向上した。加えて、工場見学や抹茶カフェ等の新店が増えたことで西尾市への観光客数が10年間で1.46倍増加し、地域活性化にも貢献している。今後も抹茶の生産量維持と更なる需要拡大を目標に、組合事業に取り組んでいく。



伝統的な製法で高い評価を得る「西尾の抹茶」



「組合まつりinTOKYO」で取材を受ける様子

### ❗ ポイント!

他産地に負けないブランド構築を目指し「西尾の抹茶」を国内外に積極的にプロモーション。行政や異業種との連携が鍵となり、知名度アップと販路拡大、西尾市の地域活性化を実現した。



# 県内中小企業主要業種の景気動向

(12月末調査)

中小企業団体情報連絡員70名の情報連絡票から

過去のものを含め、詳細のものは、中央会HP (<https://www.chuokai-gifu.or.jp/chuokai/report/report01.html>) に公開しております。

## (I) 12月の特色

- ◆景況感DI値マイナス22 前月比5ポイントの上昇  
～製造業の景況感DI値マイナス17 前月比11ポイントの改善～
- ◆売上高DI値マイナス16 前月比9ポイントの改善  
～製造業の売上高DI値マイナス14 前月比22ポイントの改善～
- ◆売上高DI値は前月比で改善したが、依然として原材料・資材価格の高騰や物価高、賃上げに伴う人件費の上昇に対して価格転嫁が十分に進んでいないとの声がある
- ◆日中関係の悪化による影響を懸念する声も寄せられている

12月次景況	
項目	DI値
景況	-22 (5)
売上高	-16 (9)
販売価格	23 (-2)
収益状況	-26 (2)
資金繰り	-7 (5)
雇用人員	-7 (±0)

カッコ内は前月比増減ポイント

製造業		前年同月比						
区分	業種	調査項目	売上高	販売価格	収益状況	資金繰り	雇用人員	景況感
食料品	牛乳	乳	—	◎	—	—	—	—
		肉(国産)	—	—	—	—	—	—
	菓子	菓子	◎	—	—	—	—	—
		米菓	▲	—	▲	—	—	▲
繊維・同製品	糸織物	糸織物	—	—	▲	—	—	—
		ニット工業	—	—	—	—	—	—
	毛織物	毛織物	▲	—	▲	—	—	▲
		合成繊維織物	—	—	—	—	—	◎
木材・木製品	製材	製材	—	—	—	—	—	—
		銘木	▲	◎	▲	—	—	—
	家具	家具	◎	◎	◎	—	—	—
		東濃ひのき	▲	◎	▲	—	▲	▲
紙紙加工品	機械すき和紙	機械すき和紙	◎	◎	◎	—	—	◎
		特殊紙	▲	—	▲	▲	—	—
	紙加工品	▲	—	—	—	—	—	
印刷	印刷	▲	▲	▲	▲	—	▲	
化学ゴム	プラスチック	◎	—	—	—	—	—	
窯業・土石	陶磁器(工業)	陶磁器(工業)	—	—	▲	—	—	—
		タイル	▲	◎	▲	—	—	▲
	窯業原料	窯業原料	—	—	—	—	—	—
		石灰	▲	◎	▲	—	▲	—
	生コンクリート	生コンクリート	▲	—	—	—	—	—
		砂利生産	—	—	—	—	—	—
砕石生産	▲	—	—	—	—	—		
鉄鋼・金属	鋳物	鋳物	—	—	—	—	—	—
		刃物等金属製品(輸出)	◎	—	—	—	—	—
	刃物等金属製品(内需)	—	—	—	—	—	—	
メッキ	メッキ	▲	◎	▲	—	—	▲	
一般機械	県金属工業団地	可児工業団地	◎	◎	◎	—	—	—
		金型	▲	—	▲	▲	—	—
輸送用機器	輸送用機器	◎	—	—	—	—	—	

非製造業		前年同月比						
区分	業種	調査項目	売上高	販売価格	収益状況	資金繰り	雇用人員	景況感
卸売業	電設資材卸	電設資材卸	—	◎	—	—	—	—
		陶磁器産地卸	◎	◎	—	—	—	—
		機械・工具販売	▲	◎	▲	—	—	▲
小売業	青果販売	青果販売	▲	◎	—	—	—	▲
		水産物商業	—	◎	—	—	—	▲
	家電機器販売	家電機器販売	—	—	—	—	—	—
		メガネ販売	▲	—	—	—	—	—
	中古自動車販売	中古自動車販売	—	—	—	—	—	▲
		石油製品販売	▲	▲	▲	▲	—	▲
		共同店舗(飛騨)	—	—	—	—	—	—
生花販売	生花販売	▲	▲	—	—	—	—	
	岐阜市商店街	—	—	—	—	—	—	
大垣市商店街	大垣市商店街	—	◎	▲	—	—	▲	
	高山市商店街	◎	◎	—	—	—	—	
	自動車車体整備	—	—	—	—	—	—	
サービス業	長良川畔旅館	長良川畔旅館	—	—	—	—	—	—
		下呂温泉旅館	—	—	—	—	—	—
	高山旅館	高山旅館	—	◎	—	—	—	—
		クリーニング	▲	—	▲	—	—	▲
	広告美術	広告美術	—	—	▲	—	—	—
		旅行業	▲	—	—	—	—	—
理容・美容業	理容・美容業	▲	—	—	—	—	—	
	土木(岐阜地区)	◎	—	—	—	—	—	
建設業	土木(飛騨地区)	土木(飛騨地区)	—	—	—	—	—	—
		建築設計	▲	—	—	—	—	—
	鉄構造物	鉄構造物	—	—	—	—	—	—
		電気工事	◎	◎	—	—	—	▲
	管設備工事	管設備工事	—	—	—	—	—	—
		建築板金	▲	—	▲	▲	—	▲
室内装飾	室内装飾	—	—	—	—	—	—	
	木造建築	▲	—	▲	—	—	—	
運輸業	貨物運送(岐阜地区)	貨物運送(岐阜地区)	—	—	—	—	—	—
		軽運送	◎	—	—	—	—	—
貨物運送(県内)	—	—	—	—	—	—		

凡例  
 ◎: [増加]、[上昇]、[好転]  
 —: [不変]  
 ▲: [減少]、[下降]、[悪化]

## 今年もよろしくお願ひします

日頃より、岐阜県中央会の活動にご理解・ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

本年も組合及び中小企業・小規模事業者のために業務に励んでまいりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

さて、皆様に本紙をより一層ご活用いただくため、掲載記事の見直しを随時行っております。ご意見やご提案をお寄せ下さい。また、本誌を組合員の皆様への情報提供などにご活用いただきますようお願い申し上げます。



## DXって実際どうなの？成功事例から学ぶ変革のヒント

中央会では、中小企業・小規模事業者の皆様のDX導入推進を目的として「バックオフィス業務等DX導入支援事業」相談窓口を設置し、専門家による相談窓口対応などを通じて、バックオフィス業務に係るクラウドサービス等の導入支援を実施しています。

このコーナーでは、本事業の専門家である4名のDXアドバイザーに、DXに取り組んだ支援事例やツールの活用方法についてご執筆いただきます。今回は、長尾DXアドバイザーにご執筆いただきます。

【お問合せ窓口】 TEL:058-277-1104

### 本当にAIは経理業務の味方なのか？

人工知能(AI)を活用し、会計の自動化が実現できれば、会計業務のフローが大幅に改善する。経理環境に不慣れな担当者にとって、これまでは、数百種類ある勘定科目や税務区分から正しいものを選ぶ必要があり、それ相当の経理知識が必要とされてきた経緯があった。

そこで、過去の実績データと生成AI、ルールを組み合わせて正しい科目や区分を自動で表示するようにしたのが会計の自動化(クラウド会計)と言われる領域だ。人間の確認が不要な水準に達しているこの領域は、日々進歩を遂げており、今後、さらなる自動化が進めば、経理業務は経営判断に役立つ情報を提供する



ための分析業務などに集中できる。「単なるコストや人件費削減ではなく、価値の創出に挑戦できる」これが最大の目的だと言える。

ただ、実際、現場ではそう上手くいかないのが現実だ。その理由は、会計の自動化が、「短期的な目標」に収まってしまうからだ。経理担当者にとら「システムに頼るより、自分でやった方が早い」と最新技術の導入に拒否感を示すことが多い。面倒なシステム設定や移

行作業に慣れる前に、自分でやった方が早い、経理担当者にありがちな「バイアス」だ。ただ、全く否定もできない現実もある。例えば、受け取る請求書をAI-OCRで読み込んで「デジタル化」を進めている会社がある。この会社の経理担当者は、デジタル化した請求書を画面で目視することに抵抗を感じていると言う。そもそも、請求書を受け取って紙に転記する際に、記載しながら感じる「違和感」、書いて覚えた経験上の勘が働き、届いた請求書の不備を何度も指摘した経験があると言う。それが、今では、PC画面を通じて、請求書を眺めていると、便利な反面、こうした経験や勘が遠のいていく怖い面もあると警鐘を鳴らす。



本当にAIは経理業務の味方なのか、経理業の自動化は果たして成功事例なのか、業務改善の効率化には、隠れた綻びがあることは認識しておいた方が良いのかしれない。



税理士法人 長尾会計  
代表社員 長尾 博氏



## 商工中金の 中小企業組合支援

個々の企業では解決できないさまざまな課題に、連携して対応する中小企業組合。商工中金は、1936年の設立以来、一貫して組合・組合員の価値向上に取り組んでいます。これまでも、これからも、商工中金は、組合運営のフォローや補助金等の情報提供、ご融資を通じて、組合が手がけるさまざまな共同事業の円滑な発展をサポートしていきます。

商工中金は、経営の総合支援パートナーへ。

個人のお客さま向けの定期預金です。

有利な金利設定  
(当金庫内比較)

固定金利の半年複利  
(元本保証)

1年、2年、3年から  
期間が選べる

\\ 安心、確実、お得に増やす \\

定期預金 **マイハーベスト**

岐阜支店 058(263)9191 〒500-8828 岐阜市若宮町9-16

高山営業所 0577(32)3353 〒506-0025 高山市天満町5-1

<https://www.shokochukin.co.jp/>

商工中金

検索

人を思う。未来を思う。  
**商工中金**

この広報誌は岐阜県からの助成を受けています。